

Christian culture and history coexisting at Goto City's geopark

五島市のジオパークと共生する キリスト教文化・歴史

編著：法橋尚宏

著：太田浩子，渡邊幹生，平野延子
角野あおば，高田安由美



はじめに

五島市を訪れると、まず目に飛び込んでくるのは、美しく澄んだエメラルドブルーの海と起伏に富んだ島々の景観です。遠い昔、火山の活動によって生まれた大地は、風と波に削られながら、険しくも美しい姿を形づくってきました。荒々しい断崖や穏やかな入り江は、単なる風景ではなく、数千年にわたる地球の営みを物語る証人です。その壮大な自然は、今日ではジオパークとして、私たちに大地の記憶を静かに語りかけています。

しかし、この島々の物語は、自然の荘厳さだけでは語り尽くせません。17世紀、キリスト教が禁じられた時代、多くの信徒が厳しい迫害を逃れ、長崎県の外海地区からこの地へ移り住みました。遠い海を越えてやってきたひとびとは、厳しい環境の中で漁をし、畑を耕しながら、祈りを続けました。島の洞窟や谷あいにも身を潜め、聖母マリアを密かに拝んだ日々がありました。その信仰は、荒涼とした地形や深い森と溶け合いながら息づいていたのです。

やがて明治の世となり禁教が解かれると、ひとびとは信仰を公然とかかげ、祈りの象徴として次々と教会を建てました。質素な木造の礼拝堂から、鉄川与助てつかわよすけの設計による堂々たるレンガ造りの教会まで、その姿は島々の景観と調和しながら並び建ち、今もなお地域の精神的支柱となっています。海を臨む丘の上の教会、集落の真ん中に静かに佇む教会など、それぞれがそこに生きたひとびとの歴史を刻んでいるのです。

本書が描こうとするのは、まさにこの自然と信仰がともに紡いできた物語です。五島の大地は、ひとびとに厳しさと恵みを同時に与え、そこに生きるひとびとは自然とともに耐え、祈り、未来を作ってきました。ジオパークとしての価値は、地質学的な現象にとどまらず、その大地の上で営まれた文化や信仰と響き合うときに、いっそう深い意味を帯びてきます。

五島列島（下五島エリア）ジオパークとキリスト教文化・歴史は、切り離すことのできない2つの物語であり、互いに寄り添いながら今日に至っています。本書を通じて、その交わりの豊かさに触れていただければ、五島市は風土の境域を超え、人類と自然の共生を考えるための学びの場として映ることでしょう。

どうぞこの一冊を手がかりに、五島市の大地に刻まれたキリスト教の祈りと歴史の旅へと歩み出していただければ幸いです。

神戸大学教授
法橋尚宏

1. 長崎へのキリスト教伝来と五島

日本は、弥生時代後半から朝鮮半島南部との貿易を始めた歴史があります。長崎は、日本の西の玄関口に位置し、海に面した地形であることから、中国や朝鮮との外交や貿易の中心でもありました。長崎港は、波が穏やかで深い湾であるという特徴もあり、1571年に当時の藩主である大村純忠^{すみただ}により大型船が入港できる港として開港されました。純忠は、平戸^{ほかうら}、外浦^{よこせうら}、横瀬浦^{よこせうら}、島原、大村、分知^{ぶんち}の6つの町を造成し、イエズス会（カトリック教会の男子修道会）に寄進しています。それ以降、イエズス会は、長崎を日本の小ローマとして布教活動の拠点とし、多くの宣教師が行き交うことになりました。長崎港は、開港後、ポルトガル、オランダなどとの貿易が始まり、多くの外国船が入港するようになりました。長崎での布教活動にとって、極めて有利な場所であったことはいうまでもありません。長崎は貿易によって、中国から仏教文化、儒教思想、陶芸、漢方などが伝わりました。また、オランダからは蘭学、西洋医学、天文学、菓子、娯楽などが伝わり、長崎は今もなお、中国とオランダの文化の影響を受け、“和華蘭文化”が特徴の街並みを呈しています。

日本のキリスト教伝来は、16世紀半ば、世界の海洋を舞台にヨーロッパ諸国の海外進出が盛んになったことが背景にあります。ポルトガルやスペインは、アジア貿易を通じて経済的利益を求めるとともに、布教活動をその一環として展開していました。ポルトガル王のジョアン3世の依頼で、イエズス会の宣教師フランシスコ・ザビエルは、インドのゴアに派遣されました。ゴアで知り合った日本人のヤジロウ（弥次郎）から日本の文化の話を聞き、日本とその国民性に関心をもち、1549年に鹿児島に上陸しました。これが、日本にとって初めて西洋の宗教と本格的に出会った歴史的瞬間でもありました。ザビエルは、鹿児島で布教活動を行い、100人近くがキリスト教に改宗しました。その布教活動中に長崎県の平戸にオランダ船が入港することを知り、鹿児島を後にしました。長崎県へのキリスト教伝来は、ザビエルが平戸に入った1550年に始まりました。ザビエルは、平戸での布教活動を山口県まで拡大し、さらに京都で布教活動を行いました。当時の日本は戦国時代であり、多くの大名が領国の経営を強化するために海外貿易に着目しており、西洋からもたらされる鉄砲や火薬、珍しい物品は魅力的でした。そのため、一部の大名は積極的にキリスト教の布教を受け入れました。文化や政治の中心であった京都でも布教活動を行いましたが、戦乱と疫病により荒廃していたこともあり、キリスト教の布教は進みませんでした。そのため、九州に戻って布教活動を行ったといわれています。

九州北部から西部にかけての地域は、ポルトガル船が来航する玄関口となり、布教の中心地となっていました。とくに平戸と長崎は、貿易港として急速に発展し、宣教師の拠点ともなっていました。平戸領主や大村領主などが一時的にキリスト教を保護し、領民の改宗も進みました。長崎では、1580年に大村純忠がイエズス会に寄進し、国際的な港町として成長し、教会や学校、病院などが建てられました。こうして、九州西端の島々や港町は、西洋と日本を結ぶ接点として重要な役割を果たすことになりました。1582年には、当時キリシタン大名であった大友宗麟^{そうりん}、大村純忠、有馬晴信^{はるのぶ}らの名代として、少年4名（伊藤マンショ^{ちちお}、千々石ミゲル^{ちちいし}、中浦ジュリアン^{なかつうら}、原マルチノ^{はらのぶ}）を天正遣欧少年使節^{てんしょうけんおうしょうねんしせつ}としてローマに派遣しました。派遣の目的は、宣教の経済的・精神的支援の依頼と帰国後の布教でした。しかし、布教の広がり、同時に幕府にとって不安要素ともなりました。豊臣秀吉は、当初、キリスト教を容認していましたが、九州平定の後にその勢力拡大を警戒し、1587年に伴天連追放令（バテレン追放令、キリシ

タン宣教師の国外追放を規定した法令)を発しました。1597年にフランシスコ修道士6人を含む26人のキリシタンが長崎の西坂の丘で処刑され、キリシタン迫害の時代が始まったといわれています。

江戸幕府もまた、当初は貿易の利益を重視して布教を黙認していましたが、やがてキリスト教が体制への脅威となり得ると判断し、1612年以降、しだいに厳しい禁教政策を敷きました。島原・天草一揆(1637-1638年)は、経済的困窮と宗教的圧迫が結びついた大規模な民衆蜂起でした。一揆の終盤の主戦場となったのは、諸大名が自国にもつことのできる城をひとつに制限した法令である一国一条令により廃城となっていた原城でした。島原半島南部と天草地方の領民3万7千人が籠城し、幕府は12万人の軍勢で鎮圧しました。この一揆により幕府も大きな被害を受け、この出来事を契機に徹底した弾圧を開始しました。以後、約250年にわたって、キリスト教は日本社会から公的に姿を消すことになりました。

五島市におけるキリスト教布教のはじまりは、1566年、2人の修道士(ルイス・デ・アルメイダと日本人のロレンソ了齋)の来島によって洗礼を受けましたが、禁教令によって壊滅しました。禁教政策のもとで、信者は命を守るために住み慣れた土地を離れ、外部からの監視が比較的緩い地域に移住することを余儀なくされ、その移住先のひとつが五島列島でした。五島列島は、長崎の西方に連なる大小の島々からなり、五島市の中心である福江島をはじめ、久賀島、奈留島、杵島、嵯峨島などが点在しています。これらの島々は海に囲まれ、交通が制限されていたため、幕府の目を逃れて潜伏するには適した環境でした。さらに、五島藩が島の開拓を進めるために、移民を積極的に受け入れており、大村藩の外海地区(現在の長崎市西南部)の領民3,000人ほどが五島市へ移住しました。五島市は、漁業や農業を基盤とした自給的な生活が可能であったことから、信者は移住後も生活基盤を再建することができました。

五島市への移住は、計画的な集団移住として行われた場合もあれば、個別に逃れてきた信者が徐々に共同体を形成した場合もありました。特に外海に面した久賀島や奈留島は、早くから潜伏キリシタンの拠点となっていました。移住者は、土地の開墾や漁場の開発を進める一方、信仰を受け継ぐための小集落を築き上げました。そして、新しい土地で生活を立て直すだけでなく、迫害を逃れつつも信仰を守り続けるという二重の困難を抱えていました。

この移住の過程は単なる地理的な移動ではなく、宗教的アイデンティティを守るための文化的選択でもありました。信徒は、表向きには地元の宗教や習俗にしたがう一方で、家族や小共同体の内部では独自の信仰実践を守り続けました。こうした五島市への移住は、潜伏キリシタンの生活世界の基盤を形づくるものであり、後に世界文化遺産として評価される信仰文化の源流となったのです。

歴史が大きく変わったのは、アメリカの黒船来航によるものでした。日本は長い鎖国政策を転換し、アメリカ、イギリス、ローマなど諸外国との条約を取り交わし、事実上の開国となりました。開国後の長崎は、外国人の居留地となり、外国人信徒のために、1865年に大浦天主堂が建築されました。その後、浦上地区に潜伏していたキリシタンが教会を訪れ、神父に潜伏しながらキリスト教の信仰を続けていたことを告げました。これをきっかけとして、五島市でも信者が潜伏キリシタンであることを表明しました。ところが、徳川幕府も明治政府もキリスト教の信仰を認めなかったことから、いわゆる“五島崩れ”という摘発による投獄などの弾圧が襲いかかりました。五島市のキリスト教信者は、1873年のキリスト禁教令が廃止されるまで苦難の日々を送り、中には長崎に避難した信者もありました。

長崎のキリスト教伝来と五島市は、日本におけるキリスト教伝来という歴史的瞬間とキリスト教迫害という暗黒の歴史の両側面があります。その歴史の始まりは、海に面しているという長崎特有の地形がありました。長崎県におけるジオパークとしては、五島列島（下五島エリア）ジオパークと島原半島ユネスコ世界ジオパークが登録されており、いずれも自然豊かで、海に近い地形を有しています。原城跡は、今でも当時の状況を物語っているかのように佇んでいます。五島市も海に面した地形から、幕府の目を逃れ、信仰を継続することができました。このような地形に守られることによって、キリスト教の信仰が守られ、続いていることに、ひとと自然との結びつきの強さを実感せずにはられません。

2. 潜伏キリシタンの生活と祈り

五島市の祈りの歴史を語るときには、禁教期を生き抜いた潜伏キリシタンの暮らしがあります。禁教政策が本格化したのは17世紀初頭、1612年以降とされています。江戸幕府はキリスト教を体制への脅威とみなし、宣教師の国外追放、信徒の取り締まり強化を行いました。そのため、信者は迫害から逃れ、信仰を守る道を模索せざるを得ませんでした。信者の多くは、幕府の監視の届きにくい地域、離島や山間部を避難の地として選びました。

五島市の大地は、火山の噴火と海の侵食によって形づくられています。切り立った断崖や入り組んだ入り江、そこに点在する集落では、ひとが自然と寄り添いながら生活してきました。また、五島市の島々は海で隔てられており、島ごとにそれぞれの暮らしの形や風土が育まれてきました。外からの影響を受けにくい環境の中で、住民同士が助け合いながら生活を支え合い、地域のつながりを大切にしてきたのです。これらのことから、五島市の島々は潜伏キリシタンの避難場所のひとつとなりました。ジオパークの視点からみると、この地形は単なる生活の場ではなく、潜伏キリシタンと自然がともに生きるための知恵の記録ともいえます。険しい断崖や入り江は、危険をはらみながらも、信者に漁場と避難の場を与え、祈りの空間を包み込む地形となりました。大地そのものが信仰を育み、信者の暮らしと祈りを守っていました。信者は、移住や潜伏という形で島に根を下ろしながら、信仰を守る拠点を作っていました。この地形は、単なる自然の造形というだけではなく、キリスト教の信仰を密かに守り抜いた信者にとっては、祈りを続ける聖なる地形でした。

禁教期、キリシタンは表向きには仏教徒や神道の信徒として暮らしながら、密かにキリスト教の教えを守り続けていました。信者の暮らしは、自然と一体化するようにして築かれていました。海沿いの洞窟や断崖の陰、深い谷間や小高い丘など、人目につかない場所に祈りの場をみいだしていました。信者にとって何よりも大切だったのは祈りの言葉“オラショ”でした。宣教師不在の状況下で、信仰は書物ではなく口伝によって代々受け継がれました。ポルトガル語やラテン語の響きを日本語に写したその祈りは、原型をとどめない部分もありましたが、信仰をつなぐ証として大切に守られました。当時、岩陰の小さな祠^{ほくら}や海を望む浜辺^{いわくら}の岩座のような場所で、信者は“オラショ”を唱え、五島の波と風の音がその声を包み込んでくれました。奈留島^{なるしま}では、“オラショ”の一部が今でも唱えられ、その音調や節回しが共同体の記憶を支えています。

潜伏キリシタンの共同体では、聖職者が不在の中で祈りの言葉や信仰の決まりを正しく受け継ぐために、独自の役割分担が生まれました。たとえば、水方^{みずかた}は、赤子に洗礼を授ける役割を担っていました。乳幼児死亡率が高かった当時、赤子が生まれてすぐに命を落とす可能性があったため、水方は一刻も早く洗礼を施すことが求められました。洗礼という行為は、信者として神に迎え入れられる象徴であり、共同体にとっては祈りの中でも最も重要な機会のひとつでした。また、信仰の実践が発覚すれば命の危険を伴う状況下において、水方の行動には大きな決断と責任が伴いました。

帳方^{ちょうかた}は、祈りの順序や祭礼の日付を帳面に記録し、共同体で祈りを整える役割を果たしました。祈祷の多くは口伝によって伝えられていましたが、この帳面は記憶の補助として機能し、祈りをひとつにまとめる拠り所となりました。さらに、聞役^{ききやく}は、祈りや物語を暗記し、語り継ぐ役目を担いました。信者の声を通じて、祈りは次世代へと確実に伝えられていきました。

禁教令の中で信仰を続けた潜伏キリシタンは、日々の暮らしの中に祈りを織り込みました。信者にとって信仰は特別な儀式だけではなく、農作業や季節の移ろいとともにあるものでした。正月や盆のような節目の日には、信者も周囲のひとびとと同じように家々を清め、仏壇に手を合わせる姿をみせました。しかし、その奥には隠された祈りがありました。仏壇の背後に小さな十字を刻んだ板を忍ばせたり、観音像をマリアに見立てたマリア観音、数珠や小石をロザリオの代わりに使う習慣がありました。信者は“南無阿弥陀仏”と唱えながらも、心の中では“アヴェ・マリア”と祈っていたと伝えられています。久賀島^{ひさかじま}の集落では、家の奥に祈りの場を設け、家族だけで祈ることもありました。こうした日常の道具や習慣を巧みに転用する知恵は、長い禁教期を生き抜くためのものであり、同時に暮らしの中に溶け込みながら、独自の信仰の形を育てていきました。

五島市の島々では、海岸近くの段々畑が生活の中心のひとつでした。火山のおかげで柔らかく栄養がある土地で、海からのミネラルを含んだ潮風が肥料となりました。春には、畑を耕す信者は鍬を手になさく十字を切り、五穀豊穰^{よしゅうく}の^{よしゅうく}予祝を祈りました。その所作は、農業と祈りが溶け込んでいました。

太陽が照りつけ、海がきらめく夏には、海辺で漁に出る信者が、船に刻んだ小さな十字をなでて出航しました。嵐や風を避けるために、湾や入り江が天然の避難所となっており、こうした地形の恩恵を信者は日々感じていました。漁から戻ると、亡くなった信徒仲間を思いながら祈りを捧げました。盆の時期になると、集落全体が先祖を迎える準備に取りかかり、先祖を弔う風習が行われました。潜伏キリシタンの家々でも、表向きには仏壇に灯をともし、精霊流しに参加しましたが、その灯の中に神への祈りも込められていました。舟に乗せる灯籠には、マリアを象徴する“M”の文字を小さく記す家もあったといわれます。死者を弔うという点では、仏教的行事とキリスト教の祈りは重なり合い、そこに五島市特有の共存の形が生まれていました。

収穫の季節である秋には、田畑の実りを喜びながら、信者は静かに感謝の祈りを捧げました。実りは神の恵みとされ、こどもにも自然は神様がくださったものと教えられていました。表向きは神棚に供え物をしても、心の中ではイエス・キリストが弟子に教えた主の祈りの冒頭の言葉である“天にまします我らの父よ”と唱えていました。こうした二重の信仰生活は、長い時間をかけて自然に身についた生活の知恵であり、地域の風土に根ざしたものでした。信者の暮らしは、海や山、風といった自然の循環と深く結びついていました。五島市の豊かな自然は、単なる背景ではなく、祈りを刻む存在でした。潮の満ち引きや四季の移ろいは、信者にとって神の声のように感じられ、祈りの時間を告げる自然の鐘として受け止められていたのです。こうした自然と祈りの調和は、五島市のジオパークが伝えようとする大地とともに生きる文化の象徴でもあります。

海風が強く吹きつけ、海が荒れる冬の夜には、菜種油を使った^{あぶらざら}油皿のほのかな灯を囲んで“オラショ”を唱えました。禁教期には、イエス・キリストの降誕を祝うクリスマスは表立ってはできませんでしたが、信徒は家族だけで夜遅くにひっそりと祈りを捧げました。その夜、信者は浜辺に小さな灯をともしました。それは、外からはほとんど見えないほどの淡い光でしたが、その一つひとつが神への祈りであり、信仰を絶やさないと願う象徴でもありました。正月には、門松や飾りをしながらも、心の中では聖なる年の始まりに祈りが捧げられました。家々では年神様を迎える準備と並行して、聖母マリアへの祈りを静かに心に留め、家族の無事を願いました。また、鏡餅を神棚に供えるようにみせながら、その背

後には十字架を刻んだ小さな板を忍ばせる家もありました。

暮らしの営みとともに、祈りは人生の節目に深く関わっていました。葬儀の場面では、表向きは仏式での葬礼^{そうらい}を行うことが多かったようです。しかし、その裏側では、家族や帳方、聞役が密かに祈りを唱え、故人の魂の安息を願いました。枕元にはロザリオに見立てた数珠や小石を置き、仏壇の裏に十字の印を隠した例も伝えられています。家族は慰め合いながらも祈りの言葉を心に込め、黙祷を続けました。

堂崎^{どうざき}教会の建立は、信仰の可視化の象徴となりました（写真 1）。禁教解除後、五島市奥浦町堂崎に建てられたこの教会は、信徒の再出発の場となりました。1873 年に初のクリスマスミサが浜辺で捧げられ、その後に仮聖堂、そして 1907 年に現在のレンガ造りの教会が完成しました。長崎県の文化財に指定され、現在は資料館を併設しています。この教会堂の建築には、地域の石材や伝統的な屋根構造、刻まれた窓ガラスといった意匠が取り入れられ、自然地形との調和も図られています。教会は、ただ祈る場所であるばかりか、島の風景の一部として、人々の視線の中にとけ込んでいます。教会の近くでは、リング石とよばれる丸石がみられますが、これは地層中の鉄分が長い年月をかけて丸く固まったもので、自然が生み出した造形として注目を浴びています（写真 2）。このような自然の造形と祈りの跡が隣接して存在する風景は、ジオパークの視点からも極めて価値あるものとして魅力を放ちます。ジオパークでは、このように信者の祈りや暮らしが地形と深く結びついてきた歴史を文化地質として位置づけています。これは、自然と人間の営みが相互に影響しあって形成された地域の記憶を未来へ伝える取り組みです。

禁教令が解かれた後、かつての潜在的な祈りが、教会堂という形で地上に現れたことは、信仰の復活を象徴していました。多くの信徒は教会建設後も祈りを続け、教会は巡礼地となりました。また、地域住民と観光客を交えた巡礼や学びの場となっています。このような教会や祈りの場は、五島市を語る上で欠かせないものです。五島市のジオパークがかかげるひとと大地のつながりの理念は、祈りと生活が地形と呼応する歴史を含んでいます。潜伏キリシタンの祈りは、時間の経過とともに生活に合わせて工夫され、継承されてきました。ジオパークは、潜伏キリシタンの祈りと生活の歴史を紡ぐ場所であり、祈りや暮らしの記憶を自然の風景とともに未来へと伝える架け橋でもあります。海岸線の岩や丘の地層は、単なる地質ではなく、潜伏キリシタンの信仰と生き方を刻んだ“祈りの地層”です。その風景をじっとみつめると、五島市の大地が刻んできた静かな祈りの声が聞こえてくるはずです。



写真 1 ● 堂崎教会



写真 2 ● リング石

3. 潜伏キリシタンゆかりのジオサイトの理解

五島列島（下五島エリア）ジオパークには、険しい山々や深い谷、波の荒い海岸線や断崖、入り江など、特徴的な自然が広がっています。これらの自然は、潜伏キリシタンにとって、その暮らしや信仰に深く関わってきました。

禁教令時代の半ば、五島の対岸に位置する大村藩（現在の長崎県大村市）の^{そとめ}外海地区では人口が増加し、食料不足が続いていました。また、多くの潜伏キリシタンが暮らしており、その処遇にも頭を悩ませていました。一方、五島藩（福江藩）では、農民が不足していました。未開拓の土地はたくさんあったため、1797年、五島藩主は大村藩主に五島開拓に向けて、領民の移住を要請しました。大村藩ではキリシタンの取り締まりが激しく、毎年、踏絵が励行されていました。その上、男子は長男しか残せないという厳しい産児制限もあり、このような苦しみから逃れたいという思いから、多くのキリシタンは住み慣れた家を捨てて、五島への移住を決めました。手形を手を開墾者として堂々と渡る者のほかに、キリシタンと知られないために大海原に向かい質素な小舟を漕ぎ、命がけて五島の島にたどり着いた者もありました。しかし、五島には先住の島民がおり、移住者は誰も住んでいない山間部や入り江に土地を切り開くしかありませんでした。希望をもち移住してきた者を待ち受けていたのは、厳しい自然を開拓し、先住民から逃れるように生活する苦悩だったのです。しかし、移住者は険しい自然の中に隠れ場を見つけ、共同体を作り、密かな祈りを続けました。自然環境での暮らしは厳しくもありましたが、恵みももたらしてくれました。山や谷、入り江という地形は、外部の目を遮るだけでなく、海での漁や豊かな水源による農作物、薪などが、潜伏キリシタンの暮らしを支えてくれたのです。五島の自然そのものが単なる背景ではなく、ひとびとが暮らしと信仰を営み、守るための舞台であり、現在の五島市に至る歴史を作ったのです。

やがて移住者が増えると、先住者との間で水や燃料の薪を巡って争いが生じ、移住者は“^{いつき}居付”という差別呼称でよばれるようになりました。1865年、長崎市の外国人居留地に創設された大浦天主堂で、^{うらかみ}浦上の潜伏キリシタン数人が神父に信仰を告白しました。これは信徒発見とよばれ、これを機に五島でも潜伏キリシタンが次々と信仰を表明しました。しかし、強い差別感情をもつ先住民が告発し、明治政府のキリシタンへの厳しい弾圧から、“五島崩れ”が起こったのです。^{ひさかじま}久賀島の^{ろうや}牢屋の^{さこ}窄では、湾に面したわずか6坪の牢屋に、こどもを含む約200人のキリシタンが監禁・収容され、拷問、病気、寒さ、飢餓などで42人が亡くなりました（写真3、4）。

五島列島（下五島エリア）ジオパークにある潜伏キリシタンが歴史を刻んだ代表的な集落は、久賀島集落と^{なるしま}奈留島の^{えがみ}江上集落であり、現在でもその場所に住民が暮らしています。

（1）久賀島集落

久賀島は五島列島の南部に位置し、北側から中央部に向かって湾入する久賀湾を中心とし、そのまわりを山の地形が^{ばてい}馬蹄形に取り囲む、周囲が約52 kmの五島市の二次離島です。



写真3 ● 牢屋の窄殉教記念教会

16 世紀後半から 17 世紀初頭にかけて、久賀島にもキリスト教が伝わったようですが、禁教によりいったん姿を消し、18 世紀には仏教集落のみがありました。1797 年、五島藩の開拓移民政策により外海地区から潜伏キリシタンが移住し、既存の仏教集落の周囲や離れた場所に集落を作りました（写真 5）。移住先は農業には適さず、移住したひとの数では自力での開拓は困難であったため、仏教徒の水田の隣に新たな水田を作ったり、仏教徒が行う農業や漁業において協働作業をするなど、仏教徒との間に互助関係を築いたともいわれています。その一方で、集落ごとに指導者を中心とする共同体を維持し、密かなキリシタンとしての信仰を続け、中国製の白磁^{はくじ}の観音像を聖母マリアに見立てた“マリア観音”に密かに祈りを捧げた集落もあります。久賀島は、解禁直前に潜伏キリシタンへの弾圧が加えられた最後の現場であり、牢屋の窄跡^{じゅんきよう}には殉教者を弔うための教会堂と記念碑が建てられています。

解禁後、カトリックに復帰したひとびとにより、島々の各集落に木造教会堂が建てられました。久賀島で最初に建てられた当時の浜脇教会堂^{はまわき}は東岸の五輪集落に移築され、旧五輪教会堂として現在も存在しています。外観は和風建築ですが内部は三廊式^{さんろうしき}で、空間構成や祭壇は本格的な教会建築様式であり、国の重要文化財に指定されています。また、禁教期からの墓地は、カトリックの墓地としても使われ、現在も残っています。

(2) 江上集落

久賀島の北東、五島列島のほぼ中央に、いくつもの入り江がありヤツデの葉のような形をした奈留島があります。江上は、奈留島の中央北部にある早房山^{はやぶさやま}の南麓に位置する大串湾^{おおくしわん}に近い河川が開削^{かいさく}した土地で、広さはわずか奥行約 300 m、幅約 100 m 足らずの平地です。当初は木々に覆われ、海岸の砂浜もわずかの広さでした。広めの平地は仏教徒の先住民が占拠しており、移住者は外海での石積みの技術を導入し、狭い土地に家や水田、周囲の斜面に畑を作りました。外海からの移住者はもともと漁師であり、漁に制限があった場所もありましたが、大串湾では漁業権が確立して



写真 4 ● 牢屋の窄殉教地の石碑



写真 5 ● 浜脇教会周辺の集落



写真 6 ● 江上天主堂

いなかったため、目の前の海から食料を獲ることができました。潜伏キリシタンは、その地形や環境に適応しながら、指導者を中心に独自に信仰を続ける方法を模索しました。

1873 年のキリスト教解禁後、潜伏キリシタンは、かつてのキリスト教の指導者の屋敷を仮の聖堂として信仰の場とし、16 世紀に伝ったカトリックへと復帰しました。1918 年には、潜伏キリシタンが漁によって蓄えた資金を利用し、谷間のわずかな平地に江上天主堂を建てました（写真 6）。世界文化遺産である“奈留島の江上集落”の構成資産であり、国指定重要文化財でもある江上天主堂のアイボリーの壁、水色の格子窓という可愛らしい姿は、青い空と海に美しく調和しています。

4. 禁教令解除後の教会建築と地域社会の再編

禁教令の^{こうきつ}高札が撤廃され、長い弾圧の時代が終わったのは 1873 年のことです。自由な信仰が認められ、信徒は自分たちの集落に、自分たちの教会堂を建てられるようになりました。約 7 代 250 年にわたって待ち望んだ信仰の夜明けの訪れにより、人目をはばかることなく祈りを捧げられる日が来たことは、信徒にとって非常に大きな喜びでした。

この頃に建てられた代表的な教会堂が、^{ひさかじま}久賀島の港にある旧五輪教会堂です（写真 7）。木造建築で瓦屋根、簡素な佇まいは一見民家のように見えます。しかし、その内部は^{ろう}三廊式で、天井は本格的なリブ・ヴォールト構造、ゴシック風の祭壇が設けられた西洋の教会堂らしい豊かな空間が広がっています。この頃の教会堂の多くは、木造の住宅を改修した小規模なものでした。信徒は、貧しい暮らしにもかかわらず、多額の費用を寄進や積立によって賄いながら建築を進めました。旧五輪教会



写真 7 ● 旧五輪教会堂

堂も、生き残った久賀島の信徒の手によって造られた、まさに信仰心の証といえる建物です。すでに信徒が集まる祈りの場としての役割は終えているものの、地元のひとびとの熱意ある保存運動によって解体を免れて現在の場所に移築され、国指定重要文化財として大切に守られています。

本格的なレンガ造りの教会堂は、1889 年に憲法に信仰の自由が明記されて以降、各地で建立されるようになります。フランス人神父たちによる設計・指揮で建築された^{どうざき}堂崎教会（福江島）のような洋風の立派な教会堂は、ひとびとの新たな宣教や信仰の拠点となりました。レンガでの建築は、石材よりも安価で木材よりも耐久性に優れているという利点がある一方で、施工に携わる地元の信徒が扱いに慣れていないといったデメリットもありました。そこで、長崎の教会堂では、木造とレンガ造りのハイブリッド建築が多く用いられました。また、従来では格式高い建造物には似合わないと言われ、^{しっくい}漆喰で塗るなどして隠されてきたレンガそのものの表面をデザインとして意匠的に用いたのも大きな特徴です。独自の技術と創意工夫によって、教会堂の荘厳な外観と、広々とした内部空間を実現しようとする取り組みは、地元大工の心を刺激し、建築技術を向上させました。こうして、しだいに外国人宣教師の手から教えが広がり、日本人大工が主体となって、教会堂を設計・施工するようになっていくのです。

長崎の教会堂を語る上で欠かせない人物が、^{てつかわよすけ}鉄川与助（1879 年－1976 年）です。上五島で代々続く大工棟梁の家系に生まれた与助は、ペルー神父をはじめとする宣教師たちの教会堂建築から大きな影響を受け、意欲的に技術や知識を修得しました。27 歳で家業を継いでからは、^{なかどおりじま}中道島にある^{ひやみず}冷水教会を皮切りに、長崎各地で数々の教会堂を手がけました。その才能は近代建築史においても高く評価され、“教会建築の父”とも称されていますが、与助自身は生涯仏教徒だったそうです。97 歳で没するまでに、設計した教会堂は約 30 棟、かかわった教会堂の数は 50 棟にのぼり、現在ではその多くが文化財的価値を認められています。福江島にある^{みずのうら}水ノ浦教会堂（写真 8）は、与助が最後に個人で設計を行った国内最大規模の木造教会堂です。禁教令解除後に地域の信徒の手でいち早く建立されたものが、1938 年、老

朽化のため与助によって再建されました。青空に映える白亜の美しい聖堂には、ロマネスク、ゴシック、和風などのさまざまな建築様式が取り入れられています。小高い丘の上に建ち、“くちびるに歌を”などの映画の舞台にもなったこの場所からは、穏やかな水ノ浦湾が一望できます。

1923年の関東大震災以降は、石やレンガに替わって、耐久性の高い鉄筋コンクリートの教会堂が盛んに建築されるようになりました。久賀島西岸にある^{はまわき}浜脇教会堂は、五島市で最初のコンクリ

ート造りの教会です。三角形の^{しょうとう}鐘塔と八角形の^{せんとう}尖塔がそびえる、堅牢で近代的な教会堂は、建築中からひとびとの注目を集めました。建立当時に真っ白だった外壁は、戦時中には、敵からの空襲を避けるために黒く塗りつぶされていたそうです。現在は信徒によって修復されており、背後に広がる緑の風景と調和した美しい白亜の姿は、海の上からでもすぐに見つけることができます。

このように、禁教令が解除されて以降、各地に教会堂が建てられてきました。五島の教会堂の多くが海のそばに建てられているのは、弾圧を逃れて五島に移住し、^{へんび}辺鄙で狭い沿岸部に集落を作ること余儀なくされた潜伏キリシタンの歴史を映し出しています。西洋の建築知識と日本の伝統的な施工技術、そして島の特殊な地理的条件の融合が生み出した独自の様相をもつ教会堂は、現在でも多くのひとを惹きつけています。

教会堂の多くには、木や石などの、住民の暮らしに身近な材料が用いられています。五島市の冬は暖かく夏は涼しい海洋性気候は、多様な生態系を生み出しました。大工棟梁や信徒は、時代背景やその土地の地理的な条件に応じて、資源をさまざまに組み合わせながら教会堂を建立しました。また、椿を模したステンドグラスのような、自然をモチーフにした装飾も随所にみられます。五島の教会群は、豊かな自然の恵みを活用しながら、島で生活するひとびとの手によって作り上げられてきたものなのです。五島の風土と信仰が結びついた場所のひとつとしてあげられるのが、五島各地のルルドの洞窟です。19世紀半ばにピレネー山脈の麓にあるルルド地方で、少女ベルナデッタ・スビルーが奇跡的に出現した聖母マリアと出会い、洞窟の聖水を示されたという奇跡がありました。この出来事は、ヨーロッパで大きな話題となり、日本にも紹介されました。そして1899年、日本で初めてのルルドの洞窟が、福江島の井持浦教会堂の横に造られました(写真9)。これ以降、五島市では多くの教会にルルドが設けられ、島内外の信徒の心の拠り所となりました。井持浦教会のルルドの洞窟の建設には、当時の五島教区であるペリユー神父のよびかけで、五島全域から信徒が持ち寄った石が用いられてい



写真8 ● 水ノ浦教会



写真9 ● ルルドの洞窟と聖母像（井持浦教会）

まず、四方を海で囲まれ、五島層群とよばれる地層や、鬼岳^{おんだけ}をはじめとする火山群からなる五島市は、地域ごとに特色ある大地を形成しています。洞窟は、海石や溶岩といった島の各地から持ち寄られたさまざまな岩石を一つひとつ積み上げて築かれました。表情豊かに聖母像を包み込むその風景は、まさに、五島市の際立って豊かな地質とヨーロッパ由来の信仰のマリアージュといえます。

禁教令が解かれ、フランスから神父が来島すると、多くの潜伏キリシタンは改めて洗礼を受け、カトリックに復帰していきました。五島市を含む長崎全域には、共同体としての教会組織が存在し、カトリックの信徒どうしのつながりを作っています。一方で、教会には入らず、潜伏キリシタン独自の、土着の信仰形態を守り続けることを選んだひとびともおり、それまでの潜伏キリシタンと区別するために“かくれキリシタン”とよばれています。苦難の歴史を生き抜いてきた信仰の心は、時代に合わせて変容しながらも、地元の信徒によって大切に現代へと受け継がれてきました。また、かつては差別を受けることもあったキリシタンですが、徐々に地域でも大きな役割を担うようになりました。五島市の奥浦^{おくうら}を発祥とする“小部屋”“女部屋”では、神父たち（写真 10）の導きを受け、女性信徒による献身的な救済事業が行われてきました。また、各地に建設された修道院は、医療・教育・社会福祉といったさまざまな施設を運営するなど、島での暮らしにも欠かせない存在となりました。現在でも福江島では、お告げのマリア修道会が運営する聖マリア病院が医療を提供しています。こうしてキリスト教は、信徒以外にとってもなじみ深い、五島の生活文化として根付いていきました。



写真 10 ● マルマン神父・ペルー神父像（堂崎教会堂）

現在、教会群やその他の史跡は、地域社会の中で、信仰や生活の場、島のシンボルとしてだけでなく、迫害・殉教、潜伏、信仰の復活と布教といった、文化的な記憶を深く刻む場としての役割を担っています。多くの教会堂は、信徒による寄付や日常的な労働奉仕によって管理・維持されてきました。長崎の歴史的な建造物は、ひとびとの信仰に裏打ちされた熱意によって支えられているといえます。こうした教会堂の存在は、16 世紀から続くキリスト教の信仰が、今もなお受け継がれ続けていることの証でもあるのです。また、近年、五島市の教会群は観光資源としても注目されています。教会のもつ景観的な美しさや、和洋の建築様式が混ざり合った独特な構造、なにより日本ジオパークに認定された五島市の豊かな環境との調和は、ときを超えて大きな魅力を織り成し、島外のひとびとをも魅了しています。

5. ジオパークと共生するキリスト教

五島市の島々では、自然と祈りが溶け合い、まるで絵画のように見える風景と出会うことがあります。青く輝く海、なだらかな丘と急斜面が交互に広がる自然豊かな島は、訪れるひとの心を穏やかなものにします。さらに、五島市の地形そのものが信仰のあり方を支えてきました。火山の噴火と隆起によって生まれた断崖や入り江は、ときにひとびとを守り、ときに試練を与えてきました。森の中の洞窟や海辺の岩陰などは、禁教の時代にキリスト教信徒を隠し、祈りの場となりました。禁教解除後に建築された教会が豊かな自然と共生するように島の随所に佇む姿は、まるで自然の一部のようです。教会は、この島々で生きるひとびとの心の拠り所であり、自然とともに歩んできた五島市の文化そのものでもあります。自然への畏敬と感謝は、信仰と切り離せないものとしてひとびとの心に根づいています。自然と調和するように建つ教会の姿は、祈りの場であると同時に、地域と自然がともに生きる象徴でもあります。ジオパークと共生することは、五島市の信仰やひとびとの暮らしの中に息づいています。自然の力を恐れながらも敬い、神という存在を自然に重ねながら生きてきたのです。祈りの跡が地層のように重なり、自然と人間が対話してきた時間の深さを感じます。ジオサイトをめぐることは、五島市で暮らすひとびとの生活と祈りの歴史をたどることでもあるのです。

五島市の各地に点在する教会や集落には、それぞれの土地ならではの自然との関わりが息づいています。その象徴のひとつが、福江島にある堂崎^{どうざき}教会です。入り江の穏やかな海に向かって建てられており、潮の満ち引きによって光が揺らめき、赤煉瓦の壁面が海の色を映します。かつて禁教の時代、海岸沿いの洞窟で祈りを捧げていた信徒が、信仰を公にできるようになってから建てたこの教会は、海とともにある祈りの象徴です。海を見つめることは、神に祈ることと同義でした。海風に吹かれながら教会へ向かう道を歩くと、自然と祈りがひとつに溶け合う感覚を覚えます。こうした風景こそが、五島市のジオパークの本質であり、ジオパークと信仰がともに息づく場所なのです。

同じく、福江島の西端に位置する玉之浦^{たまのうら}教会は、青々とそびえる山々を背に、穏やかな入り江を望む小さな集落の中に建っています。素朴^{せいひつ}で静謐な佇まいが、海と山、集落、空のすべてと調和し、風景の一部として溶け込んでおり、訪れるひとに深い安らぎを与えます。自然に守られながら祈り続ける玉之浦教会の姿は、ひとと自然と信仰の共生という五島市のあり方を象徴しているといえます。

近年では、まちづくりや観光の面でも、自然とともに生きることが注目されるようになりました。その象徴のひとつが福江島の五島つばき蒸溜所(写真11)です。かつて隠れクリシタンの祈りの場であった半泊^{はんどまり}教会(写真12)の横に建てられた蒸溜所です。この地域のボタニカルを使用したクラフトジンの蒸溜所を作るプロジェクトで建てられたこの蒸溜所は、隣接する教会を維持管理する教会^{きょうかいもり}守として寄り添うように生産を行っていくことを目指しています。建物は修道院のような回廊をもつ独特の設計で、中央の蒸溜室を中庭に見立て、その周囲を静かな回廊が囲んでいます。ガ



写真11 ● 五島つばき蒸溜所

ラス越しに見える蒸溜器は、ひとびとの祈りを具現化した祈りの炎のように輝き、訪れるひとびとに静かな時間をもたらします。まるで祈りとのづくりがともに息づく、現代の小さな聖堂のような空間です。ジンは元々薬用として生まれ、イタリアの修道院で蒸溜されていたといわれています。その歴史にオマージュするかのようなクラフトジンは、“GOTOGIN”と名付けられ、この半泊という場所で紡がれてきた風景や歴史、そこでのひとびとの生活が結びついた風土をもつ酒造りが行われています。



写真 12 ● 半泊教会

五島つばき蒸溜所では、名前のとおり椿の種を使用しています。椿の種を炒ってすりつぶし、^{しんせき}浸漬蒸溜することで、深みのある香りと味わいを生み出しています。五島市の椿は、1万本以上自生し、固有の品種も存在します。厳しい自然の中でもよく育ち、厳しい冬に力強く美しい花を咲かせる椿は、命の強さと希望の象徴として、島に暮らすひとびとを励まし、強い風から島の暮らしを守ってきました。その果実から取れる油は、食用はもちろん、美容オイルとしても活用されてきました。また、五島市では椿は信仰の象徴ともいわれています。厳しい風や潮から家を守っただけではなく、禁教期には家族を守る沈黙の守護者でもありました。現在では椿の植樹活動や五島椿まつりなど、地域とこどもが協力して自然と文化を守り伝える取り組みも続けられています。椿をとおして自然と信仰がつながり、未来への祈りが形になっているのです。そのような五島市にとって特別な存在である椿を使用し、この蒸溜所では酒造りを行っています。さらに、五島市の自然が育んだ美しくおいしい湧き水も、“GOTOGIN”の特別感をさらに高めています。また、五島つばき蒸溜所は、国内で初めて再生可能エネルギーだけで稼働する蒸溜所となっており、まさに自然から与えられた恵みを感謝とともに次へつなぐという五島市の信仰の精神と重なり、形となったものといえます。このように、教会と蒸溜所は一見まったく異なるようにみえますが、どちらも自然とひととの共生の思想を形にしたものです。教会は信仰の拠点として祈りを受け止め、蒸溜所は自然の恵みを現代に伝える場となっており、自然に寄り添いながら生きる五島市のひとびとの姿を映し出しているのです。

また、地域住民や信徒による活動も、町づくりの新たな形として息づいています。教会やその周囲の清掃活動、海岸の漂着ごみの回収、こどもへの環境学習など、祈りと環境保全を一体とした取り組みが行われています。信仰の心が、地域を守る力となり、自然とともに生きる意識を次の世代へとつないでいるのです。

こうした動きは、観光においても新たな価値を生み出しています。五島市では、教会群やジオサイトをめぐるツアーが企画され、単に建築や景観を楽しむだけでなく、自然と祈りが共生してきた姿やひとと自然の調和という視点から学びを得ることができます。ガイドや信徒の語りをとおして、訪れるひとびとは五島市の自然と信仰の物語に触れることができます。また、神という超越的な存在に心を寄せ、これまでの自分自身を振り返り、これからの生き方を再考する機会を得ることができます。

こうした数々の営みは、ジオパークと共生する信仰の形そのものです。祈りの場である教会も、ものづくりの場である蒸溜所も、そして島に暮らすひとびとの日常も、すべてが自然と調和しながら息づいています。風の音、波の響き、鳥の鳴き声の中に、ひとびとの祈りが重なり合い、島全体がひとつの大きな聖堂のように感じられます。五島市のジオパークは、地球の恵みと信仰がともに生きる祈りの大地といえます。ここでは、過去と未来、自然とひと、祈りと暮らしがひとつに結ばれ、新しい文化を育て続けています。ジオパークと共生するキリスト教は、過去の信仰の記憶を守るだけでなく、自然の恵みとともにこれからの新しい文化を育てる営みでもあります。五島市には、ひとと自然、そして信仰が調和して生き続ける、ここならではの未来が息づいています。五島市全体をひとつの物語として、未来へ伝えていこうとしています。

これからの五島市では、祈りと自然が調和するこの風景を、未来へどのように受け渡していくかが問われています。島のこどもが教会や森、海辺で過ごす時間の中で、祈りと自然へのまなざしを受け継いでいくことこそが、ジオパークの理念を最も美しく体現する姿なのかもしれません。信仰を守ること、自然を守ること、どちらも命を尊ぶという点でつながっています。五島市の地で紡がれる静かな祈りは、これからも世界に向けて共生の心を語りかけていくでしょう。

五島市を訪れるひとびとにとって、この島の旅は単なる観光ではありません。教会を巡り、椿の香りに包まれ、風や波の音に耳を澄ますと、私たち自身も自然と祈りの一部になります。島のひとびとが長い年月をかけて守ってきた自然とともにある信仰は、訪れる一人ひとりの心にも静かに根づいていくことでしょう。ジオパークを歩くことは、地球とひとの対話の時間を生きることです。五島市の祈りの風景が、そのことをやさしく教えてくれます。

6. 五島市内の教会堂と巡礼ツーリズム

五島市には、現在、20 棟のカトリック教会堂が遺存^{いそん}しています。近世における禁教政策のもと、長崎県の外海地区^{そとめ}から迫害を逃れて五島市へと移住した潜伏キリシタンは、厳しい自然環境と共生しながら信仰を守り継ぎました。やがて明治期に禁教が解かれると、その子孫は信仰の顕彰^{けんしょう}と共同体の結束を象徴するものとして、島嶼各地に教会を建立しました。これらの教会群は、地形・地質に規定された集落立地や生活環境と不可分に形成されており、自然環境と人間活動の相互作用を示す文化的景観として顕著な価値を有します。すなわち、五島市の教会群は単なる宗教建築の集合ではなく、島嶼の地質的基盤、海洋文化、歴史的記憶が織りなすジオパークとしての脈絡の中で理解されるべき存在です。

信仰の場である教会（写真 13, 14）を訪ね、静謐^{せいひつ}な祈りの空間に身を置くことで、歴史と精神文化の深層に触れることができます。さらに、教会巡礼は宗教的体験であると同時に、ジオパーク的視点から島嶼の地質・地形と文化の相互作用を学ぶ契機ともなります。



写真 13 ● 人里離れた山の中に建つ旧繁敷教会



写真 14 ● 二次離島にある嵯峨島教会

1) 福江教会^{ふくえ}

住所：長崎県五島市末広町 3-6

Google マップ：<https://maps.app.goo.gl/AQUcbShi7s81MjVn9>



2) 浦頭教会^{うらがしら}

住所：長崎県五島市平蔵町 2716

Google マップ：<https://maps.app.goo.gl/LXGHCRPaiCiwdDwk9>



3) 堂崎教会^{どうざき}

住所：長崎県五島市奥浦町堂崎 2019

Google マップ：<https://maps.app.goo.gl/TdCJQ3AhhqexnNuk9>



4) みやばら 宮原教会

住所：長崎県五島市戸岐町 773-2

Google マップ：<https://maps.app.goo.gl/BrKfRkfbRwaSV7r56>



5) はんとまり 半泊教会

住所：長崎県五島市戸岐町半泊 1223

Google マップ：<https://maps.app.goo.gl/SqhKkaTm8EgQ4bMV7>



6) みずのうら 水ノ浦教会

住所：長崎県五島市岐宿町岐宿 1643-1

Google マップ：<https://maps.app.goo.gl/tbpePbZyM4mqGvnG9>



7) うちおり 打折教会

住所：長崎県五島市岐宿町川原打折

Google マップ：<https://maps.app.goo.gl/X5SrjYuZVWychjWKA>



8) くすはら 楠原教会

住所：長崎県五島市岐宿町楠原

Google マップ：<https://maps.app.goo.gl/grPCvSeeP3JiT4Jd9>



9) みいらく 三井楽教会

住所：長崎県五島市三井楽町嶽 1420

Google マップ：<https://maps.app.goo.gl/Cgj2f4H5mMvDaYKR6>



10) 貝津教会

住所：長崎県五島市三井楽町貝津 458

Google マップ：<https://maps.app.goo.gl/esaSPWwgW99a5uaD7>



11) 嵯峨島教会

住所：長崎県五島市三井楽町嵯峨島

Google マップ：<https://maps.app.goo.gl/ktR79PJ4foSyDvkk6>



12) 井持浦教会

住所：長崎県五島市玉之浦町玉之浦 1243

Google マップ：<https://maps.app.goo.gl/JEzHctgTn6XTknCUA>



13) 玉之浦教会

住所：長崎県五島市玉之浦町玉之浦 622-1

Google マップ：<https://maps.app.goo.gl/3WQ27SdU9xPv43Xy6>



14) 旧繁敷教会

住所：長崎県五島市富江町繁敷道蓮寺

Google マップ：<https://maps.app.goo.gl/3fcuTd719zmK9M7J7>



15) 江上天主堂

住所：長崎県五島市奈留町大串 1131

Google マップ：<https://maps.app.goo.gl/uZbr1iX3a73f5Xmj6>



16) 奈留教会

住所：長崎県五島市奈留町浦 395

Google マップ：<https://maps.app.goo.gl/7kdNxYMnjM7vWd5Y8>



17) 五輪教会

住所：長崎県五島市蕨町五輪

Google マップ：<https://maps.app.goo.gl/ia1Fn6bhRGE6pKZR7>



18) 旧五輪教会堂

住所：長崎県五島市蕨町 993-11

Google マップ：<https://maps.app.goo.gl/BwUQH9hywsUFTQS68>



19) 牢屋の窄殉教記念教会

住所：長崎県五島市久賀町大開

Google マップ：<https://maps.app.goo.gl/K8dGkVnBCTHUSJM99>



20) 浜脇教会

住所：長崎県五島市田ノ浦町 263

Google マップ：<https://maps.app.goo.gl/6xNpyfTaT1Pi35WP9>



編著者

法橋 尚宏（ほうはし なおひろ）

1993年東京大学大学院医学系研究科博士課程中退（博士号取得）。東京大学大学院医学系研究科講師などを経て、2006年より神戸大学医学部（小児・家族看護学）教授。2008年に部局化により、神戸大学大学院保健学研究科（家族看護学分野）教授。東京大学医学部附属病院分院、東邦大学医学部附属大橋病院、Johns Hopkins Children's Center, MassGeneral Hospital for Children などにおいて臨床研修。専門は、家族看護学と小児看護学。著名な理論家であり、2005年に家族同心球環境理論、2013年に家族ケア／ケアリング理論、2018年に家族ピラードシステム理論などを公表し、世界中で翻訳されて利用されている。2016年には、世界の看護界における最高名誉となる“Fellow of the American Academy of Nursing (FAAN)”の称号を授与。2021年、高野山真言宗の僧侶となり、法名“拓説”を授かる。五島市では、2006年よりさまざまな研究に着手し、170回以上訪島している。五島列島（下五島エリア）ジオパーク活動支援助成金により、ジオパークを健康作りに役立てる研究も開始している。2023年より、五島列島（下五島エリア）ジオパークPR大使を拝命。個人ポータルサイトは<https://nursingresearch.jp/>である。

著者

太田浩子（神戸大学大学院保健学研究科家族看護学分野）
渡邊幹生（神戸大学大学院保健学研究科家族看護学分野）
平野延子（神戸大学大学院保健学研究科家族看護学分野）
角野あおば（神戸大学大学院保健学研究科家族看護学分野）
高田安由美（神戸大学大学院保健学研究科家族看護学分野）

謝辞

本書は、2025年度五島列島（下五島エリア）ジオパーク活動支援助成金（五島列島ジオパーク推進協議会）の支援を受け、制作しました。この場をお借りして、満腔の感謝を捧げます。

五島市のジオパークと共生するキリスト教文化・歴史

2025年12月16日 初版第1刷発行

著者：法橋 尚宏
発行人：中川 清
発行所：有限会社 EDITEX（<http://editex.jp/>）
〒216-0033 神奈川県川崎市宮前区南平台 20-37-401

© Naohiro Hohashi
Printed in Japan
ISBN 978-4-903320-83-0

Not to be reproduced without permission. Any reference to the contents herein must cite the source.



法橋 研究室
Hohashi Lab.



五島列島ジオパーク
(下五島エリア)
Goto Islands Geopark
(Shimo-goto Area)